

スクリャービンの《前奏曲》を用いたフォルマシオン・ミュージカル教育法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2018-02-21 キーワード (Ja): フォルマシオン・ミュージカル教育法, アレクサンドル・スクリャービン, 前奏曲 キーワード (En): Formation musical education method, Alexander Scriabin, Preludes 作成者: 柳川, 瑞季, Yanagawa, Mizuki メールアドレス: 所属:
URL	https://senzoku.repo.nii.ac.jp/records/705

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



スクリャービンの《前奏曲》を用いた フォルマシオン・ミュージカル教育法

Formation musical education method using Scriabin's "Preludes"

柳 川 瑞 季

Mizuki Yanagawa

I はじめに

現在ソルフェージュ教材は、様々な用途とレベルに応じて使い分けることが出来るほど多様な種類のものが出版されているが、それらの教材はあらゆる能力を出来るだけ短期間に向上させることを目標としているため、類似課題や反復課題が多く収録されているよう見受けられる。しかし、その教材から学習者が音楽的な魅力を感じ取ることは残念ながら難しい。よって修得した要素が実作品の中でどのように用いられているか把握出来ず、ソルフェージュの授業内で難解な課題が出来たとしても、より音楽的な演奏に近づくことが出来ない学習者が存在してしまうと考える。

フランスで1970年代に発案され用いられ始めたフォルマシオン・ミュージカル教材は、実際の楽曲から作成された教材である。そのため課題から音楽性や作品の魅力を感じ取りやすく、1つの作品として教材に取り組むことが出来る。また楽曲から学ぶべき多くの要素を抽出することにより、学習者のレベルに合わせて様々な教材を作成することも可能である。それらの点により、既存のソルフェージュ教材に比べると、学習した内容を実際の演奏に直結させることが比較的容易であると考えられる。だがそのフォルマシオン・ミュージカル教材であっても、実際に使われている授業では楽曲の一部分しか取り上げられていないことも多く、抜粋された部分の特徴的なリズムや調性の把握などは可能であるものの、楽曲全体の様式や魅力を理解しないまま学習を終えてしまうことがある。また教材作成に労を要するため、教材として扱いやすいいくつかの作品のみが取り上げられることも多く、様々な楽曲を学習出来る契機となる教育法であるにも関わらず有効活用されていないよう推測される。そして、選曲された実作品を通して様式の変化や要素を段階的に学ぶことが出来るフォルマシオン・ミュージカル教材は、ないに等しい。

本研究ノートでは、ロマン期から近・現代の過渡期にあたるロシアの作曲家・ピアニスト、アレクサンドル・スクリャービン（1872-1915）が作曲したピアノのための《前奏曲》を楽曲の一例として取り上げ、時代とともに変貌を遂げた様式や要素の理解と演奏表現のための学習方法を提案し、本大学で私が前期に担当していたソルフェージュの授業2クラスで試みた検証結果を挙げていく。本研究は、筆者が東京藝術大学大学院音楽研究科ソルフェージュ研究分野に在籍していた際、上記と同様の問題点と提案を掲げた上でスクリャービンの前奏曲全90曲を用いた教材作成を行ったが、修士論文提出時は教材

を掲載するに留まったため、今回は実際に授業で扱いその有用性を調査したものである。

指導教案として用いた《前奏曲》だが、スクリャービンが生涯書き続けてきた全 90 曲の楽曲であり、ロマン期に影響を受け作曲された調性による作品から、徐々に神秘和音を扱った無調的な作品へと変化した曲集である。また同様にリズムや拍子、ダイナミクスや表情記号においても多様な変遷を見ることが出来る。そして各楽曲は 1 曲を通して教案に用いることが可能な程度の長さである作品が多く、演奏に関する難度も幅があり、様々なレベルの学習者に対応することも可能だろう。スクリャービンの《前奏曲》を用いた学習によってそれぞれの楽曲の魅力に触れ、スクリャービンの《前奏曲》やそれ以外のピアノ作品は勿論のこと、他の作曲家の楽曲（ピアノ以外の編成も含）に取り組む際にも修得した様式や要素を演奏に応用し、より音楽的な演奏を目指すことが出来るだろうと考えた。

まず、2 クラスに用いたそれぞれの指導教案と各クラスの学生らが書いた感想をいくつか取り上げる。

Ⅱ 指導教案と学生たちの感想

指導教案 1.（中級レベル）

対象：大学 1 年生（うち 1 名 4 年生含）。専攻は様々であり、ピアノコース、管楽器コース、打楽器コース、音楽・音響デザインコース、ミュージカルコース、音楽教育コースの学生計 20 名

＜スクリャービンの《前奏曲》を用いてソルフエージュ学習をしよう＞

※作成したワークシートを授業の始めに配布した。

クラスの中で、スクリャービン作品を演奏したことがある学生は誰もおらず、名前を聞いたことがある学生も数名にとどまった。まずは、作曲家の顔写真なども活用しつつスクリャービンについての説明をし、空欄を埋める方式で話を進めた。実際の作品は何も聞かせず、学生の興味を誘うよう努めた（下記□で囲ったものが実際に用いたワークシートである）。

アレクサンドル・ニコラエヴィッチ・スクリャービン(1872~1915年)は()生まれの作曲家であるが、()や()らの影響を受けた書法から始まり、()音楽に至るまで、43年間の生涯の中で作風を変化させた。

・初期(1872~1902年)

スクリャービンは幼い頃から音楽に親しみ、ピアニストとして将来を嘱望されていた。さらに即興演奏にも興味を持ち、作曲もピアノ演奏と並行して勉強した。その後入学したモスクワ音楽院にて()と同級生になり、2人は20世紀初頭の「ロシアの音楽界の逸材」と呼ばれていたものの、モスクワ音楽院卒業時に作曲科と合わせた大金メダルは()だった。また同時期、スクリャービンは級友とピアノの腕を競い、10度も掴めない小さな手でリストの《ドンファン・ファンタジー》を練習し続け、右手を痛めた。のちに回復はしたものの、これを機に次第に作曲に専念するようになった。

・中期(1903~1907年)

スクリャービンは1900年以降()に傾倒した。それらの思想は後年の作品に大きな影響を与えた。中期の作品は、和声においてV7、V9の和音やその下方変位を多く用いており、それらがトニック和音に解決せず別の和音に進行している。この進行は調性を曖昧にしており、徐々に調性離脱の方向へと向かっていく契機となった

・後期(1908~1915年)

後期の楽曲は、和声においてV9の下方変位和音に付加6度音をもつ神秘和音や、わずかに構成音の異なる各種V9の和音を用いて、それらのみで作品を構成し、調性から離脱していった。また初期や中期作品よりもリズムがさらに複雑になり、表情記号も特異なものをたびたび扱うようになった。

(1) 視唱1 《前奏曲 Op.9-1》を用いて【譜例1】

- (a) 作品の説明。この作品については、ロマン派の作品から影響を受けていることや左手作品に至った経緯などを説明した。視唱課題では付点のズムと様々な音程を学習する旨を伝えた。
- (b) ピアノで視唱声部を弾き、学生も一緒に歌った(音取りを実施した)。
- (c) 注意すべき点の指導(2種類の付点のリズムについて、異名同音について)。また音程についても補足的な指導をした。特にピアノコースの学生たちは音程について考える機会に乏しいように見受けられたので、増音程の捉え方などについても話した。
- (d) ピアノ伴奏にのせて歌った。
- (e) 実際の作品では左手のみで演奏されることについて、冒頭のみ私が実演をした1。

【譜例 1】

Andante

Piano

1 *p* *cresc.*

6 *f* *dim.* *p* *cresc.*

11 *cresc.* *f*

16 *dim.* *p* *pp*

22 *dim.* *p* *pp*

27

31

(2) 欠如部分のある聴音 《前奏曲 Op.11-5》を用いて【譜例 2】

- (a) 作品の説明。この作品については、ロマン派の作品から影響を受けていることや左手のフレーズも右手の旋律とともに重要であることを説明し、演奏の際に左手にも注意を傾けることを学習するために聴音を行う旨を伝えた。
- (b) 左手に欠如部分のある聴音を実施した。
- (c) 答えを提示し、もう一度演奏した。学生は自身の答えとの確認を行った。
- (d) 右手の旋律部分（最上声部）の視唱を行った。和声の部分はソプラノ以外の声部も歌った（分離唱を実施した）。

【譜例 2】



(3) リズム読み 《前奏曲 Op.33-3》を用いて

- (a) 作品の説明。この作品では、打楽器的な様々なリズムについて学習する旨を伝えた。
- (b) 作品に使われるリズムをリズム読みした。その際強弱などにも留意することを指導。
- (c) 実際の作品の楽譜を見ながら鑑賞した（ワークシートに楽譜を掲載した）。

(4) 視唱 2（2声の視唱）《前奏曲 Op.35-2》を用いて【譜例 3】

- (a) 作品の説明。この作品では、初期作品には用いられなかった和声進行があり、それはスクリャーピンが傾倒した哲学や神智学が影響していることを説明した。視唱課題ではスクリャーピン特有の音程感と和声感を体験する旨を伝えた。
- (b) 1声部ずつピアノで視唱声部を弾き、学生も一緒に歌った。
- (c) 注意すべき点の指導（異名同音についてなど）。音程の取りにくい箇所については取り出して練習した。
- (d) ピアノ伴奏にのせて歌った（パートを入れ替えて再度行った）。

【譜例 3】

The musical score for Example 3 consists of four systems, each with a vocal line (treble clef) and a piano accompaniment (bass clef). The key signature is B-flat major (two flats). The time signature is 4/4. The score includes various dynamic markings such as *p* (piano), *pp* (pianissimo), *cresc.* (crescendo), *mf* (mezzo-forte), and *f* (forte). It also features crescendo instructions like *cresc. poco a poco*. The score is marked with measure numbers 5, 9, and 13 at the beginning of their respective systems.

(5) 欠如部分のある和声聴音、視唱 3 【譜例 4】 《前奏曲 Op.67-1》を用いて

- (a) 作品の説明。この作品は神秘和音が用いられており、初期とは全く趣の異なった和声であること、無調性のため視唱課題でも調性に頼ることが出来ないことを伝え、様々な音程感を学習すると同時に特有の和声感を感じ取るために聴音を行うことを指導。同時代に作曲された《交響曲第5番プロメテウス》や未完に終わった《神秘劇》、共感覚についても補足的に説明。
- (b) 作品に用いられた和声のソプラノ声部を聴音。答えを提示。
- (c) 視唱声部をピアノで弾き、学生も一緒に歌った。
- (d) 指導者が伴奏と視唱声部を両方弾いた上で学生はもう一度歌った。

(e) ピアノ伴奏にのせて歌った。

(f) 聴音課題とピアノ伴奏の和声を鳴らし、聴音課題との関連を明示。

【譜例 4】 視唱課題の譜例のみである。

Andante

pp vague, mystérieux

Piano

pp vague, mystérieux

déchirant

déchirant

pp

pp

molto accel.

molto ritard.

七

最後に感想を書いてもらい、答案を回収した。

当日は、機材トラブルにより音源を用いて作品を鑑賞することがほぼ出来なかったのが悔やまれるが、音源にかかわって私が演奏するなどの代替策で指導を乗り越えた。回収したワークシートに学生が書いた感想をいくつか紹介する。

- ・ 普段サックスの曲ばかり聴いていたし、吹いていたので、今回の授業は新鮮でした。スクリャービンの曲を聴いたのは初めてだったし、スクリャービンについて知ったのも初めてだったので、自分をもっと音楽について勉強しなければならないと思いました。（管楽器コース サクソフォーン専攻）
- ・ スクリャービンという作曲家に初めて触れました。一人の作曲家を年順（時期順）に曲を通して学んでいくことはとても興味深い方法だし、聴音などが間に組み込まれていることにより変化に気づきやすかったです。音楽史の（ ）埋めの作業の際、ヒントを出しながら（生徒が積極的に発言しやすく）クラス全体で考えるのもおもしろいかと思います。（管楽器コース サクソフォーン専攻）
- ・ 実際に曲名のある曲を聴音や視唱することで知らなかった曲も知れるのはとても良いなと思った。視唱が難しかった。（打楽器コース）
- ・ 右手でメロディーを弾いて左手を聴音するのはとてもいい訓練になると思った。（左手聞き取るのが苦手だが）パートごとやリズムごとにやってくれると自分がもし次この曲をやるときに譜読みが速くできそうだった。（ピアノコース）
- ・ 本当にある曲で聴音をやってみて、普段の何気ないメロディーとは違い、作曲家の人生が反映されている曲だと思うととてもおもしろかったです。特に、音楽史のような有名な作曲家同士の出会いとか、どんな人生だったか、などの話が興味をそそり楽しかったです。視唱はとても難しくて歌えませんでした。もしまた機会があったらもう少し易しい曲や視唱をやりたいと思いました。（管楽器コース トロンボーン専攻）
- ・ スクリャービンの曲はいくつか知ってはいたので、やはりよくわからない曲だなと感じました。実際の曲でのソルフェージュは初めてだったので、面白かったですが、スクリャービンの曲はむずかしかったのもう少しわかりやすめなものでもやってみたいです。無調性の曲はクラシックの曲とは違い心地いいという感覚にはならないと感じました。でも、いつもやっている和声聴音よりなぜか聞きやすかったです。スクリャービンは不思議な方向に向かってよくわからない曲を作っていますが、これも音楽だと考える音楽はやはり難しいと感じました。（ミュージカルコース）

次に他方のクラスの指導教案を取り上げる。

指導教案 2.（上級レベル）

対象：大学2年生（うち2名3年生含）。専攻は様々であり、ピアノコース、電子オルガンコース、管楽器コース、弦楽器コース、音楽・音響デザインコースの学生計18名

＜スクリャービンの《前奏曲》を用いてソルフェージュ学習をしよう＞

※作成したワークシートを授業の始めに配布した。

作曲家紹介は指導教案1.と同様であるが、1クラス目の学生からのアドバイスを参考にし、学生に空欄を問いかける形で進めた。こちらのクラスでは実際にスクリャービンの作品を演奏したことがある学生もあり、1クラス目よりかはスクリャービンの認知度が高かった。

(1) 欠如部分のある聴音 1 《前奏曲 Op.11-21》を用いて【譜例 5】

- (a) 作品の説明。この作品は、ロマン派の影響を受けた楽曲ではあるものの拍子が1小節ごとに変化すること、左手が右手の音域に入り組んでいることにより正確な声部の把握が必要になること、テンポの揺れを学習することを伝えた。
- (b) 欠如部分のある聴音（左右両パート、テンポの変化について rit. or a tempo のどちらかに丸をつける）聴音の際は音楽的に、テンポを揺らして演奏した。
- (c) 回収し採点したものを翌週に返却し、解答を見ながらもう一度聞いてもらった。

【譜例 5】

The musical score for Chopin's Preludes, Op. 11, No. 21, is presented in a standard piano format. It begins with the tempo marking 'Andante' and a metronome indication of 108 beats per minute. The key signature is one flat (B-flat major). The score is divided into six systems, each containing two staves (treble and bass). The tempo markings are: 'Andante' (♩ = 108) at the start, 'rit.' at measure 4, 'a tempo' at measure 5, 'rit. or a tempo' at measure 9, 'rit. or a tempo' at measure 16, and 'a tempo' at measure 20. The piece concludes with a 'dolciss.' marking at measure 23.

(2) 視唱1 《前奏曲 Op.13-5》を用いて

- (a) 作品の説明。この作品については、ロマン派の作品から影響を受けていることなどを説明し、視唱課題の際は休符をどのように音楽的に処理するか、転調がどのように行われているかを指導した。
- (b) 視唱声部をピアノで弾き、学生も一緒に歌った。
- (c) 強弱等に気を付け、音楽的に歌うことを指示。
- (d) ピアノ伴奏で歌った。

(3) 視唱2 《前奏曲 Op.37-3》を用いて

- (a) 作品の説明。この作品は、ロマン派の作品からの影響は残りながらも独特な付点のリズムが用いられていることを主に説明した。
- (b) 視唱声部をピアノで弾き、学生も一緒に歌った。
- (c) 注意すべき点の指導（3連音符のリズム、異名同音）を行った。ピアノ伴奏と掛け合いになっている点についても明示。
- (d) ピアノ伴奏で歌った。

(4) 欠如部分のある聴音2 《前奏曲 Op.48-2》を用いて

- (a) 作品の説明。この作品は指導案1.の（2）欠如部分のある聴音と同様、左手部分の重要性について説明した。
- (b) 幅広い音域を動く左手部分に欠如部分がある聴音。
- (c) 回収し採点したものを翌週に返却し、解答を見ながらもう一度聞いてもらった。

(5) 欠如部分のある和声聴音、視唱3 《前奏曲 Op.67-1》を用いて

これについては指導教案1.と同内容であるが、聴音の分量が2倍である。

- (a) 作品の説明。この作品は指導案1.の（5）欠如部分のある和声聴音、視唱と同内容を指導した。同時代に作曲された《交響曲第5番プロメテウス》や未完に終わった《神秘劇》、共感覚についても補足的に説明。
- (b) 作品に用いられた和声のソプラノ声部を聴音。
- (c) 視唱声部をピアノで弾き、学生も一緒に歌った。
- (d) 指導者が伴奏と視唱声部を両方弾いた上で学生はもう一度歌った。
- (e) ピアノ伴奏にのせて歌った。
- (f) 聴音課題とピアノ伴奏の和声を弾き、聴音課題との関連を明示。

最後に答案を回収した。回収した回収したワークシートに学生が書いた感想をいくつか紹介する。

・歴史の流れを学びながら、その時の曲などできてとても勉強になりました。個人的には、普段の聴音

より難しかったのでもっとどんどんやりたいです。新曲もダブルシャープなどとりにくい音ばかりで大変でしたが、作曲者のことも勉強できたしとてもいい時間を過ごせたなと思います。(管楽器コース トランペット専攻)

・音階を聞いて怖い気持ちになったのは初めてでした。実際の曲を使った学習だと、私はヴァイオリン科なのでピアノの曲などを知ることが出来るので良いなと思いました。交響曲でもこういう学習をしてみたいです。楽しかったです。(弦楽器コース ヴァイオリン専攻)

・実際の曲を聴音・視唱することでソルフェージュは演奏のために勉強しているのだなと改めて思った。聴音をすると調を考えたり和声を考えたりするからちゃんと理解して演奏できると思った。視唱では歌うことでメロディラインや強弱を感じやすいと思った。(ピアノコース)

・神秘的な和音がどうなっているのか知れて、スクリャービンのようにここまで神秘的な曲でなくても、いろいろな曲を分析していったら自分の曲の中にも使える和音があるなと、とても勉強になりました。無調性の曲でも、不思議と気持ち悪くなくて、神秘的に作り上げるスクリャービンはすごいと思いました。(音楽・音響デザインコース)

・実際の曲を使った方が自分の曲につなげやすいなと思いました。私はフルートで現代曲を吹くことがあるのですが、一度ベリオの「セクエンツァ」を吹いたことがあります。無調でテンポだけ決まっているけれど、リズムも無く…というものでした。でもどこかスクリャービンの後期の雰囲気似ていて驚きました。自分の曲を吹くときもこうやって音を見ていけば良いのか！と勉強になりました。(管楽器コース フルート専攻)

Ⅲ 検証結果

私自身、大学院在籍時に作成した指導教案を実際に指導の現場で実施することがなかったため、今回2クラスで試みることが出来たことはとても有意義であった。ソルフェージュを授業内のみで完結させず、それぞれの実技に少しでもつなげることを目標にすることは授業の始めに学生にも伝えたが、どうしても授業内では聴音課題、視唱課題、リズム課題などをこなすことだけに集中してしまい、そこから音楽性を見出すことは難しい。学生の感想にもあったように、実際の作品を用いてソルフェージュ授業を行うことは、それぞれの実技につながることをより実感できる契機だと改めて感じた。

今回の指導教案では、教案の中にある注意すべき音程やリズム、和声感などを補足的に学生に伝えたが、それらがスクリャービン以外の別の曲にも使われていることや、その音程がもつ意義などについても加えて指導し、それぞれの実技で取り掛かる楽曲の中に同内容があったときに少しでも参考になるよう努めた。学生がより音楽的な演奏になるよう自主的に考えるのが指導者としては本望であるが、助言を与えることで学生がより考えやすくなることを見込んで今回は指導を行った。感想を読むと少しは伝わったのではと感じ、安堵している。

答案を回収し採点の際に感じた点としては、左手部分の聴音や変拍子の聴音、両手の音域が近い聴音に不慣れな点であり、2クラスともに聴音の出来は良くなかった。それは、左手部分の把握能力に乏しかったり、拍子感や音楽的なテンポの揺れに不慣れであったり、旋律とその他の声部の聞き分けが出来ていないことを意味すると考える。既存の聴音課題ではそのような問題は少ないため、学生らには少々

難しかったかもしれないが、楽曲には多々そのような箇所は見受けられる。その結果、演奏の際楽曲の分析力に乏しい可能性が出てきてしまい、音楽的な演奏を目指すことが難しくなると感じた。

ソルフエージュの授業は、実作品を演奏する際どのような部分において参考になるのかを指導することや、演奏の際苦手の部分を克服するために必要なソルフエージュ学習を提案するなど、より音楽的な演奏に近づくための手助けだと考える。学生らが少しでも有意義な時間を過ごせるよう、発展的な学習内容を考え今後も指導していきたい。

注

- 1) 学生に配布したワークシートにはピアノソロ譜の冒頭を掲載した。

参考文献一覧

- 秋庭佳代子 2008 年 「A・スクリャービンのピアノのための「前奏曲」：和声語法の観点からの考察」『美学論究』第 23 号 17-32 頁
- 大村新 2005 年 7 月『スクリャービンの世界～神秘主義とロシア・ピアノニズム』 国立音楽大学図書館展示資料
- 齋藤圭子 2012 年 『無調音楽のためのソルフエージュA. シェーンベルク＜ピアノ組曲＞ op.25 を教材として一』 東京藝術大学博士学位論文
- 志賀真知子 2002 年 「スクリャービン ピアノ音楽語法の変遷—小品からのアプローチ—」『大阪芸術大学紀要＜藝術＞』 25 巻 54-66 頁
- 照屋正樹 1994 年度 「ソルフエージュからフォルマシオン・ミュージカルへ ——フォルマシオン・ミュージカルの教育現況と課題」『洗足論叢』 第 23 号 111-122 頁
- 照屋正樹 2001 年 「フォルマシオン・ミュージカルの日本に於ける実践事例と問題点」『洗足論叢』 第 30 号 29-40 頁
- 野原泰子 2008 年 『スクリャービンの後期作品：その音楽語法と思想の表出をめぐる考察』 東京藝術大学博士学位論文
- 柳川瑞季 2017 年 『スクリャービンの＜前奏曲＞を用いたフォルマシオン・ミュージカル教育法』 東京藝術大学修士学位論文

参照楽譜一覧

- Alexander, Scriabin. 1973 *THE COMPLETE PRELUDES AND ETUDES FOR PIANOFORTE SOLO*. Edited by K.N.Igumnov and Y.I.Mil'shteyn. NEW YORK : DOVER PUBLICATIONS
- Alexander Skryabin. 24 *Préludes* Opus 11. Edited by Valentina Rubcova. Fingering by Michael Schneidt. Germany : G.Henle Verlag, 1996
- スクリャービン 『スクリャービン全集 4』伊達純・岡田敦子編集・校訂、東京：春秋社、1999 年
- SKRJABIN. *KLAVIERWERKE BAND II PRÉLUDES, POÉMES*. Edited by Günter Philipp. Germany : EDITION PETERS · LEIPZIG, 1967-68
- スクリアピン 『スクリアピン ピアノ曲集 第四巻・前奏曲集』平井丈二郎監修・校訂、東京：全音楽譜出版社、1996 年